資料紹介

福生市史資料編（考古）を読んで

渡辺忠胤

福生市内の考古部門の現在までの研究成果を集大成した「福生市史資料編（考古）」が昨年刊行された。

総頁311頁、口絵に本市の代表的遺跡である長沢遺跡のカラー写真を含む縄文遺物を掲載し、遺跡分布図（総数18）、遺跡一覧表の別刷を加えて、配慮のいきとどいた構成と充実した内容をもった資料編である。

本書は四部からなる。第一部は福生市の考古学的研究（45頁）、第二部は福生市の主要遺跡（171頁）、第三部は福生市内採集の遺物（31頁）第四部は（付編）福生市の板碑（45頁）である。

第一部では、本市ではじめての本格的調査、昭和四十年代からの長沢遺跡発掘に先立つ考古資料の収集や研究の概観と関係文献目録が紹介され、さらに主要文献3点が全文再録されている。文献1は「西多摩文化財総合調査報告」（東京都教育委員会、昭和42）の福生の部抜粋、2は「福生で出掘された石器について」（木村東一郎、昭和25）、3は「福生市の遺跡」（東京都福生市文化財調査報告Ⅷ、C・T・キーリ、昭52）である。2は、戦後まもない時期での貴重な記録であり、3は英文報告の訳であるが、地理的環境や遺跡の立地、花粉データによる古環境の学術的研究成果をも取り入れ、市内各所の遺跡の性格を概観し、主体をなす縄文人の生活舞台とその実態を中心に記述された文献として注目される。

第二部の福生市の主要遺跡では5遺跡が報告されている。縄文後期初頭の称名寺式土器を出土した福生市1号遺跡、縄文早期の撚糸文土器、中期勝坂式土器、後期初頭の土器などを含む福生不動尊遺跡、縄文後期初頭から中葉の遺跡として注目される6号遺跡、縄文前期後半、中期遺物を確

認した13号遺跡、それに市内最大の遺跡として昭和45年以来七次にわたって調査の積み重ねられた縄文中期を主体とする集落遺跡、長沢遺跡（4号遺跡）である。当然のことながら本資料集の半ば近くの141頁はこの遺跡の紹介にあてられている。

第三部は佐藤正一、井上九万兵、小野茂時各氏が市内で採集された石鏃、石器類の報告に加えて中世の遺跡地長者屋敷（現昭島市松原町）に関連する長者堀伝承と熊川神社所蔵の出土銭の紹介である。

第四部には福生市の板碑が総括されている。

ところで考古学の発掘調査には、いつでも宿命的な制約条件がつきまとう。遺跡そのものの立地条件、全面発掘のままならぬ今日的制約や調査体制はもとよりであるが、調査方法の進展による発掘や資料整理の精度の問題、研究の新たな視点、問題提起をふまえた調査方法などである。

前記の長沢遺跡の展開する段丘は、ローム層の堆積なく、拝島礫層を基盤に砂質土層、黒土層、表土と堆積が見られる。遺構の確認も極めて困難なところである。かつて私は、ここの第一次・第二次調査の折、塩野半十郎氏にさそわれて数度調査地点を見学したことがあった。その時の強い印象は、「これでは遺構の全貌をつかむのは実に難事業だな」という思いであった。長沢遺跡は長期にわたる成果の蓄積があった。関連して思い出されることが一つ。それは戦後まもなくの考古学調査で、小規模で調査方法も遺構の確認と主要遺物の出土状態に重点をおいた、今日の精緻さから比べるとおおらかなものであった時のこと。指導して下さった甲野勇先生に私が発した質問、「次々と発掘調査が実施され、遺跡が破壊され、地域の遺跡の発掘が不可能となった時に考古学の成果はどうなるのでしょうか。」と。「そうなれば、従来の調査記録と遺物を活用して、各遺跡を再検討し、地域の遺跡を綜合的に考察することでしょう。報文の比較検討は重要な仕事になるでしょう。」これが甲野先生の答であった。今日のように縄文村落の実態が広域調査によって解明されることなど推測の域を出なかった当時のことである。

実はここにいう前の関連する調査記録を再検討して新しい発掘成果をより完全なものとし遺跡の全容をつかむことはまことに難しいのである。記録の精粗や遺物の散逸もある。ところが本資料の長沢遺跡については、長期の成果をこれら種々の制約条件を克服して立派に大遺跡の実態に迫られている。ここにいたるまでご苦労の並々でなかったことが察せられるのである。特筆される成果といっても過言ではないであろう。

考古学の成果は、遺跡の性格が豊かに紹介され、遺物が人々に公開、活用されることによって歴史的な遺産としてその意義を発揮するものであろう。その点で本資料編が見

事に立派な成果を集約されたことを喜びたい。と同時に和田哲先生をはじめ、関係各位のご尽力に対し感謝と敬意の念を禁じえない。

以上、不十分な本書の紹介を感想を交えて記したが、本書は文字通り現在までの市内の考古学研究の文献と資料を集大成し、今後完成される市史本編の基礎資料として貴重な意義をもつものと考えられる。また多摩の考古学研究史の一環として当地方の歴史を復元する際にも欠くべからざる文献であろう。さらには周辺のすでに完成刊行されている近隣周辺の市や町の考古文献と共に、今後のとりわけ多摩川左岸の地域研究を進める上でも大いに活用されるべき内容を備えている。また間接的には文化財行政の今後の展望をつかむ上でも示唆するところが大きいというべきであろう。

（わたなべ・ただたね　八王子市文化財審議会会長）

既刊案内

福生市史資料編　民俗上　（平成元年6月刊行）
生業・衣食住・年中行事・人生儀礼の各項目を主婦の目を通して、わかりやすく、きめ細かに記述。
A5版　四一八頁　三八〇〇円　送料三一〇円

福生市史資料編　近世1　（平成元年2月刊行）
福生村・熊川村の二ヶ村に伝存する古文書から、『市史』に必要な史料を三冊に収載。本編は第一冊目。
A5版　四七〇頁　三八〇〇円　送料三一〇円

福生市史資料編　中世　寺社　（昭和62年刊行）
福生を支配した大石氏・北条氏照の文書を網羅。市域の寺社関係文書を収載。
A5版　五七二頁　三八〇〇円　送料三一〇円

福生市史資料編　考古　（昭和63年刊行）
考古学研究、主要遺跡・遺物、板碑を収録し、福生市域の考古学研究の集大成。
A5版　三一四頁　三七〇〇円　送料三一〇円

福生市史編さん室　〒197　福生市本町五番地
電話0425(51)1511